

〔目的〕高齢者が健康で充実した生活を送るには、適切な食生活を行うのに十分な咀嚼能力を持つことが必要であると考え、咀嚼能力の現状について調査を行ってきたが、今回は、咀嚼能力と生活機能の関係について検討した。

〔方法〕岡山市及び周辺の高齢者（65歳以上）で施設に在園する者、仕事をもち、あるいは趣味の集まりなどに積極的に参加しながら通常の日常生活を送っている者 181名（男56名、女 125名）を対象とした。歯の現状、生活機能は面接調査により、咀嚼能力はチューインガム法を用いて溶出糖量により判定した。生活機能は老研式活動能力指標（東京都老人総合研究所）を用いて評価した。総数が少ないので統計処理は男女合計で行った。

〔結果〕1)歯の現状の人数比率は、現在歯は13.8%、局部義歯は34.8%、総義歯は45.9%、無歯顎は 5.5%であった。2)年齢区分別平均現在歯数は65～69歳：16.31±2.2本、70～74歳：10.2±10.5本、75～79歳：4.9±8.8本、80～84歳：2.6±6.1本、85～89歳：1.9±3.6本、90歳以上：全員無歯顎であった。3)平均溶出糖量は 0.59±0.33gであり、加齢とともに減少した。4)平均活動能力得点は9.2±3.5点（13点満点）で、加齢につれて減少した。5)溶出糖量と活動能力得点の間には中程度の相関が認められた。活動能力指標の以下の3因子と溶出糖量との相関はそれぞれ「手段的自立」が $r=0.36$ 、「知的能動性」が $r=0.44$ 、「社会的役割」 $r=0.40$ であり、いずれも中程度の相関を示した。6)大小臼歯の現在歯数多数群（9～20本）の者の平均活動能力得点は11.2±2.5点、同少数群（0～8本）の者のそれは8.7±3.5点で前者の方が後者よりも生活機能が有意に高かった。